

自立と共生をめざす家庭科教育

— 家族・家庭を核として —

橋本雅子¹

家庭科教育では、生活の自立とともに、互いに支え合っていることを自覚し、自分や周囲の人々をより深く理解できる豊かな心や社会性を育むことが求められている。そこで、本研究では、生活するよりどころである「家族・家庭」を核とし、自立と共生を根底に据えて題材や指導法のあり方を探った。

はじめに

近年、生活環境や社会環境の変化には著しいものがある。物質的に豊かになり便利になることによって、衣食住に関しては何不自由なく多くの物を簡単に手に入れることや処理することが可能になった。その反面生活体験や自然体験、また、人と直接かかわる機会が少なくなり、子どもたちの発達や意識・行動に与える影響について危惧されている。科学技術や情報技術の進展の中で、基本的な生活習慣や技能の低下、価値観の変化をあやぶむ声も少なくない。

平成10年の学習指導要領告示以降、小・中・高等学校の家庭科は、少子高齢化への対応や男女共同参画社会の推進を考慮して、家庭のあり方や家族の人間関係、子育ての意義等の内容が一層充実されるようになり、今日、家庭科教育に寄せられる期待も大きい。

研究テーマ設定の理由

中学校技術・家庭科の家庭分野は「実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な衣食住に関する基礎的な知識と技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。」を目標としている。生徒が生活の自立をめざす中で、人々に支えられて生活していることに気づき、自分も生活を支える一員としての自覚をもって、生活をよりよくすることができるようにしたい。そこで、家庭の機能について理解を深め、家庭・社会の一員として家庭生活を総合的にとらえる力を身につけ、男女で協力して生活することの重要性や家庭観等について健全な考え方を醸成したいと考える。

また、従来から重要視されている「家族と家庭生活」は、プライバシーにもかかわり、家庭科を教える

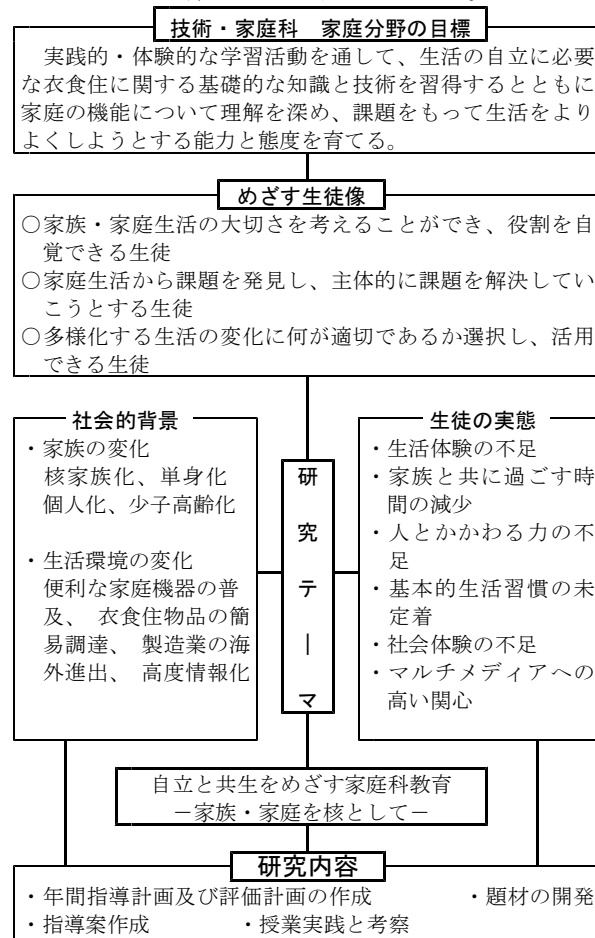
立場から扱いにくいと思われ、研究も多くないことから、どのような内容をどのような指導方法で行えばよいのか等を研究することは必須のことと考える。

これらのことから、自立と共生をめざす家庭科教育のあり方について、家族・家庭の学習を中心として研究を進めることにした。

研究の内容

1 研究構想図

研究の内容を第1図のように構想した。



第1図

1 座間市立西中学校
研修分野 (家庭)

技術・家庭科は生活に密着した教科であるため、社会の変化やその時代の考えから影響を受けやすい。そこで、戦後、家庭科成立期の時代から現代に至るまでの子どもを取り巻く社会と子どもの状況及びその課題を把握し、家庭科教育のあり方を探ることにした。社会的背景と生徒の実態は第1図の通りである。

2 家庭科教育に求められるもの

家族規模の縮小、多様化する家族、家族及び地域の人間関係の希薄化により家族のまとまりが失われ、個人化現象が生じ、人間関係をつくる力が低下していることが指摘されている。そこで、人とかかわる力を育てることが重要課題として挙げられる。

上野(2002)は、「家庭科教育の目指す方向性—現状と今後の目指す方向性への一提言—」の中で「『家庭』も『学校』も以前とはだいぶ変わってきている。個人が自分の事だけを考え、嫌な事はしないで、それぞれにしたいようにしている。(中略)人間は一人では生きられない、その最小単位が家族である。その一員としての存在意義・役目について、どう支え合っていくか、(中略)認識が必要。」と家族・家庭の学習の大切さを説いている。

家庭の教育力の低下や少子高齢化への対応、男女共同参画社会の推進等をふまえ、家庭科教育に対し「家庭・家族のあり方、家庭の人間関係、子育て」に関する内容の充実が求められている。物質的な豊かさや便利さの中で失われている人とかかわりを求め、他者を支援したり、他者からの支援を受けたりという人間関係の大切さを子どもたち自身が実感できるように、さまざまな学習の場を用意する必要がある。

3 3年間を見通した年間指導計画作成と題材開発

(1) 年間指導計画作成の視点

家庭分野は「A生活の自立と衣食住」「B家族と家庭生活」の内容からなり、教科の目標達成に向けて地域・学校及び生徒の実態等に応じて学校独自に3年間を見通したカリキュラムを編成することが可能となった。そこで、「A」「B」ととらわれず、いろいろな場面で家庭や地域の人間関係の大切さを学べるように題材を工夫し、また、成長・変化の著しい中学生期の発達段階に応じた年間指導計画を考えた。1学年では自分のこととしてとらえやすい「A」の中の食生活を中心とした学習を、2学年では同じく「A」の衣生活と「B」を中心に学習する計画を立てた。「B家族と家庭生活」は、発達段階を考慮すると3学年で扱う方が自分や家族をより客観視できるので適切であるが、体験的・実践的な活動をする時間を確保するため、2学年で学習することとした。さらに3学年では、2学年の学習を発展させ、家庭生活が地域の人々とのつながりの中で成り立っていることを理解し、地域ととも

に家族・家庭のあり方を考える学習を設定した。

(2) 題材開発の視点

千田(2003)らは、「これまでの『家族や家庭についての学習』では、複雑な家庭環境を背景に持つ生徒達はどうしても『楽しい』という思いを抱けず、学習に対して意欲的に取り組む姿が見られなかった。多感な時期に家庭や家族について学習を進める事はとても大切な事ではあるが、一歩間違えば更なる自己否定を生む結果にもつながりかねない」と述べている。

他の文献からもプライバシーにかかわり、扱いにくさが報告されているが、ロールプレイング等を取り入れることで生徒のプライバシーを尊重できること、セルフエスティーム(自己肯定感)を育てることによって家族とのかかわりも肯定的にとらえる力を育成できること、それらが家族関係をよりよくすることに有効であるという示唆が得られた。また、自己肯定感を育てることは、他者を肯定し大切にす他者理解にもつながり、人とかかわる力を育てることに有効であると考え、これらを視点に置いた題材開発に取り組んだ。

4 授業実践—家族・親子のかかわりを考える—

(1) 授業の実践

家族・親子のかかわりを考える授業では、日常の何気ない会話やエピソードをテーマにロールプレイングをさせ、望ましい親子のかかわり方を考えさせる。さらに、生まれた時の家族、配偶者を選んで新たに形成する家族等、人の一生における変化に富んだ家族について、今、自分としては何ができるのか、将来に向けてどうしていきたいのか等を考えさせ、家庭や家族のあり方をとらえさせるようにした。テーマを「日常生活での自分と家族のかかわりを考えよう」とし、4時間扱いにした。指導と評価の計画は第1表に示した。

なお、具体的な学習内容の工夫と実践の考察は第1時から第4時の流れに沿って表した。

第1時：あらかじめ提示した親子の肯定的発言・否定的発言の2つの会話のパターンを擬似体験させ、家族それぞれの立場や気持ちを理解させるようにした。身近な会話を取り上げることによって生徒の興味・関心をひくようにし、肯定的にとらえることが他者理解にもつながり、家族をはじめ周囲の人との関係をよりよくすることに発展できるように考えた。ここでは、互いに支え合って生きているという共生の視点を大切にしたい。擬似体験することによって感じた気持ちや気づきをワークシートに記入させ、さらに得られた考えをまとめさせた。否定的発言では「嫌な気持ちになる」肯定的発言では「よい気持ちになる」等の生徒の記述が見られるとともに、そこからさらに「相手のことを思って話した方がいい」という考えに発展させる生徒も見られた。この体験により今まで気づけなかった周囲の人の気持ちの理解につながり、家族を思いやる優

第1表 「日常生活での自分と家族のかかわりを考えよう」の指導と評価の計画

テーマ	ねらい	学 習 活 動	時 間	学習活動における具体的評価規準				評価の方法等
				生活や技術への関心・意欲・態度	生活を工夫し創造する能力	生活の技能	生活や技術についての知識・理解	
家族の立場と気持ち	<ul style="list-style-type: none"> 自分の家族に置き換えながら、家族について理解を深める 家族の立場の違いに気づき、かかわり方による気持ちの変化を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> 親と子の肯定的な発言と否定な発言を擬似的に体験することによって、家族の気持ちを理解する 	1	<ul style="list-style-type: none"> 自分に置き換え、会話をしようとしている 家族の人のかかわり方に関心をもっている 		<ul style="list-style-type: none"> 家族の人のかかわり方に関して自分の感じたことをまとめることができる 	<ul style="list-style-type: none"> 家族の立場に気づき、かかわり方による家族の気持ちを理解する 	ワークシート1 ワークシート2 ワークシート3 取組状況
日常生活での交流	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活での家族とのかかわり方について理解を深める 日常の家庭生活の交流を擬似的に体験することを通して、家族や自分の気持ちを客観的にとらえることができる 家族とのよりよい交流のしかたを考える 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活における4つのパターンのかかわり方をロールプレイングによる発表を通して理解し、家族とのよりよい交流のしかたを考える 	1	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの立場に立って、会話をしようとしている 	<ul style="list-style-type: none"> ロールプレイングを通して、家族とのよりよい交流のしかたを考えたことができる 		<ul style="list-style-type: none"> 日常生活での家族とのかかわり方を理解している 日常の交流を擬似的に体験することを通して家族や自分の気持ちを客観的にとらえて理解する 	ワークシート3 ワークシート4 取組状況
家庭生活の意義	<ul style="list-style-type: none"> 家庭や家族の基本的な機能を理解し家庭生活に関する基礎的な知識を身につける 	<ul style="list-style-type: none"> 家族・家庭について考え、家庭生活の基本的な機能や意義について理解する 	1	<ul style="list-style-type: none"> 自分の生活や事例をもとに、家族の役割を理解しようとしている 		<ul style="list-style-type: none"> 家庭や家族の基本的な機能について発表したり、まとめることができる 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭や家族の基本的な機能を理解している 	ワークシート5 取組状況
よりよい家族関係	<ul style="list-style-type: none"> 家庭と家族関係について課題を見つけ、その解決をめざして家庭生活をよりよくしようとする 	<ul style="list-style-type: none"> 「理想の家族・家庭」について、現在と未来の視点で考え、そのために自分が今できることと、未来に向けてどのようにしていきたいかを考える 	1	<ul style="list-style-type: none"> 家庭と家族関係について関心をもって学習活動に取り組み、家庭生活をよりよくしようとしている 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭と家族関係について課題を見つけ、その解決をめざして工夫している 		<ul style="list-style-type: none"> 家庭生活に関する基礎的な知識を身につけている 	ワークシート6 ワークシート7 振り返りシート

しきや考え方の広がりが見られ、他者理解につながったと思われる。また、「家族・家庭のことをやって楽しかった」の記述に見られるように生徒の興味・関心をひくことができたと考えられる。

次に、自分と家族のかかわり方を4つのパターンに分類し、ワークシートに整理させることによって日常生活における家族とのかかわり方を意識化することができた。

第2時：日常生活における4つのパターンのかかわり方を理解させ、家族とのよりよい交流のしかたを考えさせるためにロールプレイングによる発表を取り入れた。自分以外の家族の立場や気持ちを理解すること、生徒のプライバシーを尊重すること、さらに劇を作り上げることを通して友だちとのかかわりの機会をつく

ることもねらいとした。その結果「みんなの生活がちよっとわかった気がした」の記述のように多くの話し合い活動を通して友だちの考えを知り、「劇とかめったにやらないから、すごく難しかったです。あといろいろ考えることができ、とてもよかったです」というように考えの深まりも見られた。人とかかわり方やコミュニケーションのあり方も学習でき、それぞれのねらいを融合した形で達成することができた。また、ワークシートを用いることにより自分たちが演じるだけでなく、他の班がどのようなことに気づき考えたのか、多様な考え方を共有化することになり、家族とのかかわり方について考えを深めることができた。

第3時：家族とのかかわり方に対する考えを深めたところで自分にとっての家族・家庭とは何なのかを考え

させた。自分から班員、クラスの考えというように順を追って他者の考えを知り、考え方が広がるように配慮した。この学習により、家庭の機能についての概念化を図ることができた。

第4時：4時間の授業のまとめとして、家族とのかかわりの大切さを理解し、今自分が何をすべきか、将来に向けてどのようにしていきたいのかをとらえさせることをめざした。今自分たちができることとして「一人ひとりのことを信頼すること」「話をよく聞く」「うれしいことをやる」等のワークシートへの記述があることは、よりよいかかわり方としての具体的な行動を考えることができたといえる。それまでの学習で形成された家族・家庭についての概念から、何をすべきかという行動への意識づけができた。

(2) 実践を振り返って

ワークシート1から7までを用意し、生徒が考えたことや気持ちを記録し、順を追って学習の軌跡がわかるようにすること、家族・家庭の学習内容をより自分のこととしてとらえられるようにすること、単なる活動ではなくて、記録し考えさせることによって意識化させ体験的な学習にすること。これらを考慮し、最後に学習のまとめとして全体を把握し、振り返ることができるシートを作成した。それぞれの気持ちや考えたことを記録することにより、筋道を立ててとらえることができ、学習内容を一つのまとめとして理解することができた。学習→気づき→共有化→概念化→次の学習という展開のワークシートを工夫したことにより、学習の深まりが得られた。

また、ロールプレイング等の擬似体験をさせることは、自分自身を客観視させたり、他者の立場や気持ちを理解させることができ、考える機会を与えるという点においても有効であることがわかった。そして、グループ学習の場を設けることにより、人とのかかわり方を学ばせることができた。生徒のワークシートの記述や感想からもこのような授業を行っていくことの大切さを痛感した。そこで、これらの成果を生かし家族の関係を意識した住生活、幼児の発達や高齢者とのかかわり等、家族や地域住民の一人として共に生きるという視点を重視した他の題材も考え、学習の展開例やワークシートを作成し、題材集としてまとめた。

なお、今回の授業実践で扱った題材は、前提として教師が生徒にどのような言葉かけをし、どういのかかわり方をするのかという点が重要である。そのためには家庭や地域、生徒の状況を十分把握する必要がある、日頃から生徒と密接にかかわってよりよい関係を築くことが大切であると考え。

おわりに

他者への思いやりやいたわりの心を育むこと、家族

や地域住民の一人として共に生きる力を育てること等をねらいとし、年間指導計画の作成や題材の開発に取り組んだ。そして、家庭のあり方や家族の人間関係を学ばせる授業を実践し、その成果をふまえ、幼児の発達と家族、家族にとってのよりよい住まい等の題材例を考えた。授業実践では、家族・家庭に関する学習を通して、自分も生活を支える一員であるとの自覚をもって、生活をよりよくしようとする健全な考え方の醸成に近づくことができたと考え。

本研究を通して作成した題材例のうち、授業実践できたのは「日常生活での自分と家族のかかわりを考えよう」だけであり、他の題材例の検証は今後の課題である。

家族や人とのかかわり方を学び、他者を理解し共に生きるという意識を高めることは、これからの社会において重要な課題である。実践的・体験的な活動を通してこれらを考え、学ぶことができるのは家庭科の素晴らしさであると考え。子どもたちだけでなく、大人を含め全ての人に求められている家族・家庭の大切さを認識する学習をさらに充実させていきたい。

引用文献

- 上野裕子 2002 「家庭科教育の目指す方向性－現状と今後の目指す方向性への一提言－」（『家庭科教育』76巻8号） pp. 6-10
- 千田恵・八重樫一恵・佐藤純子・岩淵誉子 2003 「家族と家庭生活を生徒とともに考える－『心理劇』の授業を通して－」（『家庭科教育』77巻3号） pp. 35-41

参考文献

- 大曲美佐子・榎木由紀・丸谷宣子 2002 「新中学校学習指導要領の技術・家庭科 家庭分野におけるカリキュラムの編成と学習材の開発と適用」（『家庭科教育』76巻2号） pp. 18-27
- 瀬戸友子 1998 『サイコドラマと「気づき」の語り合いをもとに』（高部和子編『Asset』10）ニチブン
- 堤マサエ 2003 「日本家族の変化と家庭科教育」（『家庭科教育』77巻11号） pp. 6-10
- 牧野カツコ・妹尾理子 2004 『家庭科で育つ子どもたちの力』日本家庭科教育学会編 明治図書
- ベネッセ子育て生活基本調査 2002 www.crn.or.jp/LIBRARY/KOSODATE/KOSODATE3/PDF/S1300037.PDF pp. 44-45（12月10日）
- かわさき・子どもの生活実態調査 2003 www.keins.city.kawasaki.jp/syuppan/kodomo_jittai_chosa.pdf pp. 12-17（6月18日）
- VIEW21ベネッセ教育研究総研レポート www.view21.jp/beri/open/report/syochurepo/2004/2004vo15.html（12月10日）